

19世紀のパリ民衆の世界について

—— 児玉智子氏の御批判によせて ——

木 下 賢 一

児玉智子様

本誌の第114号で拙著『第二帝政とパリ民衆の世界—「進歩」と「伝統」のはざままで—』について、詳細な御紹介と力のこもった御批判をいただきありがとうございました。特に19世紀前半に関する御自身の研究をふまえた御指摘は大変参考になりました。これに刺激を受けて、その後19世紀のパリ民衆の世界についてあれこれ考えてみました。以下、ひとまず小著に対して御批判のあった点について逐一お答えし、その後に19世紀のパリ民衆の世界について現在考えていることを、他の研究も参考にしながら少し記してみたいと思います。

まず、第4節の最後のところで、「現実社会での（労働者エリートと一引用者）労働者大衆との接点が見えてこない」と批判され、「労働者エリートが批難的とした“大衆の無関心さ”はいずれも労働者の代表選出の際の選挙を唯一の接点として導き出された評価である」と指摘されています。しかし、本文にはこれ以外に次のような例が挙げられています。例えば、タルタレは労働者の無関心をその起源にまでさかのぼって述べていますし（拙著、116ページ）、労働者の無関心さに対する一般的な指摘（同書、96ページ）や立法院への労働者候補に対する大衆の無関心さ（同書、46ページ）の例などを挙げることができます。

ここではむしろ労働者エリートと大衆の接点が希薄であったことを示すために、エリートの言説をいろいろな角度から取り上げていますので、「労働者大衆との接点が見えてこない」のは当然といえば当然なのです。小著では省略しましたが、第3章の元になっている拙論文では、大衆とエリートがより直接的に接触する労働組合評議会についても例をあげています。そこで製靴工のリーダーのクレマンはこう述べています。「労働組合評議会に関しても、同じ無関心が支配している。組合費は週10サンチームでしかないというのに。いつも、いつも、戦うのは一握りの信念をもった人々なのだ。しかも彼らは利己主義的な労働者の皮肉の餌食になっているのだ。ところがこの労働者たちは、たえず要求はするが、連帯を樹立するのを支援するためにいかなる犠牲をも払おうとはせず、時間も金も出そうとはしないのだ」¹⁾。また生産協同組合については、万博の労働者委員会の一人をして「労働者の無関心は徹底している」と言わしめています²⁾。さらに労働組合評議会の低い組織率にもそのことは示されています³⁾。

ここに表現されているのは、もちろんエリートたちから見た労働者大衆であって、大衆が現実「無関心」であったかどうかは別問題です。例えば、立法院への労働者候補に対する無関心というのは、労働者候補に対する無関心であって、多くの労働者は共和派に投票しています。また、このすぐ後にパリ・コミューンが起きているのであり、労働者エリートと大衆のこのズレの構造を明らかにすることが、序章で述べていますように、小著のテーマの一つになっています。拙著の文脈においては、ここでまず大衆に対する第二帝政期の労働者エリートの認識の変化を確認しようとしているのです。

上の部分に続いて「60年代労働者エリートの現実主義は、現実の労働者大衆を圏外において、初めて成り立つものだったのか」と疑念を表明されています。現実主義をどう定義するかにもよりますが、一般的には既存の権力関係（この場合帝政という独裁的体制）を受け入れた上で、労働者の諸条件を改善していこうとすることと定義できると思います。ですから現実主義者にとっては、現実の労働者大衆との接点そのものは、少なくとも第一義的な問題ではないのです。現実主義者というのは結果的に現実的でないことがしばしばあるものですが、この場合も労働者エリートたちは、1868年以降共和主義運動や労働者のストライキ運動の高揚のなかで影響力を失っていったわけです。

次に第5節においては、カベ主義者ブリューズの1860年代における思想的転回に対して、喜安朗氏の所説を詳しく紹介されながら、それを根拠として私の捉え方を批判されています。ここが小著に対する児玉さんの御批判の核心であると思います。前述の労働者の無関心についての叙述に対する御疑念もここに由来しているといえましょう。御批判の骨子は明快です。それは労働者エリートの思想と行動を日常における労働者大衆との接触と緊張関係のなかで捉えていないということに尽きると思います。

このような捉え方が重要であることは十分に承知しております。かつて（もう30年以上も前になりますが）私は民衆運動が共同体的な論理をもっており、組織や理論的な観点から分析するだけでは捉えることはできないとし、日常における具体的な人的結合関係に注目する必要があると主張しました。そして、第二帝政期のパリ民衆の場合、日常生活の場であるカルチエと労働の場である仕事場における共同性の具体的なあり方を解明する必要を唱えました。その場合民衆の人的結合関係を中心に見ていくことにより、日常生活における酒場と仕事場の重要性を明らかにし、そこから民衆運動を捉えなおそうとしました⁴⁾。小著は紆余曲折を経ていますが、その延長上にあります。

ところで児玉さんの御批判の根拠となっている喜安朗氏の論考ですが、この著書の少なくとも児玉さんが引用されているカベ主義者に関する部分に関しては⁵⁾、推論であって確実な根拠に基づいた論証がなされているわけではありません。喜安氏が主張されていることを、その根拠を確認しながらもう一度読んでいただきたいと思います。そうすれば少なくともこの部分に

関しては、喜安氏の主張がランシエールやシャルチエの理論的な主張に依拠しつつ、若干の状況証拠を根拠に推測しているだけであることがわかれると思います。つまり、児玉さんはここでは推論を根拠にして推論していることになるのです。

しかし、労働者の思想と行動を扱っている以上、一般的な問題として児玉さんが主張されていることを避けて通ることはできません。たしかに労働者エリートを大衆との日常的接触と緊張関係のなかで捉える必要があると思います。しかし、小著は、それだけでは第二帝政期の労働者エリートの思想と行動を明らかにするには十分ではない、ということを示そうとしているのです。日常的な関係はたしかに重要ではありますが、ときには思想やできごとが決定的な意味をもつこともあります。まして二月革命や六月蜂起、共和派の分裂、アソシアシオンによる労働者の解放という思想の実践と挫折、ナポレオンのクーデタと独裁、男子普通選挙制、めざましい産業化と都市化といった政治的・社会的激動は、個人の直接的・日常的経験を越えたものとして、少なくとも労働者エリートに受けとめられたと思われます。それゆえ、安易に19世紀前半の労働者の日常の経験からの類推をおこなうことはつつしまねばならないと思っています。

たとえば、ブリューズのような民衆の世界に密着していたエリートが、第二帝政下になぜこのような思想的転回をおこない、ブルジョワと共に営利団体としての信用組合を設立するという、イカリアとは遠く離れた「プチブル的」な行動をとったのかを明らかにすることが必要なのではないのでしょうか。これはむしろ労働者エリートにとって、第二共和政における——ブリューズの場合はとくにイカリア建設の——経験の大きさと深さを示していると考えべきでしょう。第二帝政期の労働者エリートは、小著で明らかにしているように、1848年の挫折を第二共和政や第二帝政の弾圧に帰するのではなく、労働者自身に問題があったとしているのです。労働者大衆とともにあった彼らが言っていることの意味するところを考えていただきたいのです。この経験が労働者エリートにとって、大衆との直接的関係うんぬんよりも決定的であったのです。というか、彼らの思想的転回は、上述の政治的・社会的激動という状況のなかでの大衆との接触と緊張関係を通して彼らを選び取った一つの選択であった、というのが私の結論です。これが少なくとも史料から引き出せる一つの解釈です。

拙著では、できるだけ史料を提示してその意味を歴史的状況のなかにおいて解釈するという叙述の仕方をしています。もちろん、史料というのはそれだけで真実を語るものではありませんが、少なくともここに提示された史料の意味の重みを考えていただきたいと思います。私自身予期せぬ史料に出会って驚きを感じたのですが、いやしくも歴史の研究を志す者は、そこでそんなはずはないと言ってはならないのです。そうではなくそこでなすべきことは、その事実の意味を考え直すことではないでしょうか。

それはともかくとして、児玉さんの19世紀前半の御研究からの推測が、第二帝政期の労働

者エリートの少なくとも一部には当てはまらないということは、それだけ第二共和政と第二帝政期における民衆の世界の変容が大きかったということを、逆に意味しているのではないのでしょうか。

アラン・コルバンは、フランスの感性の歴史において、19世紀中葉とくに1860年代に決定的な変容が生じていると述べていますが⁹⁾、今後このような変容と、小著で明らかにした1860年代のパリの民衆世界の変容とがどのような関係にあるのかということを考えていく必要があると思っています。

第6節では、次のように小著を批判され、結論されています。「労働者エリートとインターナショナルのあり方を『進歩』とし『伝統的』な民衆の心性と対置させ、そこに労働者エリートと大衆の乖離の一因をみるのは図式的であり、固定的な認識に陥る危険もあるのではないか。(中略)本書の方法では労働者エリートと大衆の乖離という、従来の運動史から導き出された側面を越えていく展望は得難いと考えられる」とされています。

ここでも御批判の根拠は労働者エリートと大衆の関係の捉え方にあるといえます。民衆の場合、伝統的な社会的表象を用いながら、それを自分たちの状況に合わせて読みかえていきますから、伝統的な表象が見られたからといってその意味するところが昔のままであるわけではないということは、ここでは当然の前提となっています。民衆のおかれていた状況がフランス革命時とは異なることも十分承知しております(拙著、291ページ)。その上で、「進歩」の観念に捉えられた労働者エリートと「伝統」的な表象をバネに行動する民衆の間のズレを問題にしたのです。それゆえ、児玉さんが述べられているように、単純に「進歩」と「伝統」を対置しているわけではありませんし、労働者エリートと大衆の関係を固定化して捉えているのでもありません。プロイセン軍攻囲下のパリにおいて、「進歩」のインターナショナルは「伝統」的な表象をバネに行動したのです。

しかし、たしかに小著では大衆次元において伝統的な表象が意味する内容まで明らかにしておりません。その理由は要するに史料的な問題です。可能な限り史料で明らかにできることを提示していくという「禁欲的な」方法をとったので、これ以上のことは自分が渉猟した史料では限界があったということです。

また、小著のような方法では労働運動史の新しい展望を得ることはできないと結論されていますが、序章の最後のところで述べていますように、拙著は私のこれまでの労働運動と民衆運動の研究の上に立ってはいますが、労働運動史そのものを目指したものではありません。公開集会というような労働運動とは異質な運動に大きな比重をおいているのはそのためです。私が目指したのは、第二帝政期のそれぞれの時期の政治・社会状況を最もよく表現している5人の労働者を取り上げることによって、パリ民衆の世界の構造とその変化、ひいては第二帝政期の政治・社会構造の変容の一端を明らかにすることでした。この視角から限定的に労働者エリー

トを取り上げているにすぎません。したがって、大衆との関係が直接問題にならない場合には当然それには触れていません。それにヴァルランをのぞく他の4人に関しては、史料的にはこれ以上のことはわからないというのが本当のところですが、彼らはある歴史的状況のなかで政治的舞台に登場したのですが（そのために史料が残された）、その状況が変化すれば歴史の淵に沈んでいくのであってそれ以上のことはわかりません。個人的には彼らのことをもっとよく知りたいのですが、彼らの思想と行動を媒介にして、この時代の社会に照明を当てようとする小著の意図からは、これで十分なのです。

ここで取り上げた人物は、必ずしもこれまでの労働運動史研究の代表的な労働者たちではありません。これまでの第二帝政期のパリの労働運動史においては、トランはインターナショナルの創立者の一人として高く評価されてきたのですが、パリ・コミューンに反対したために「背教者」というレッテルを貼られていますし、ブリューズの労働信用組合は当時のパリで大きな影響力をもったにもかかわらず、労働運動史のなかではプチ・ブルジョワ的な企図として否定的に扱われてきましたし、タルタレの万博労働者委員会も重要な政治的・社会的役割を演じたにもかかわらず、帝政との癒着を非難されてほとんど無視されてきたのです。労働運動を組織化と階級意識の深化という方向で捉えるならこのような結論にならざるをえないのであり、彼らの思想と行動の歴史的な意味を捉えそこねると思いました。そこで、私はこれを社会的な視角から読みかえてみようとしたのです。それに成功しているかどうかはわかりませんが、このように小著は労働運動史を意図したものではありませんが、既成の労働運動史を批判しようとはしています。小著で提示したような事実をふまえた上で労働運動史を再考する必要があるのではないのでしょうか。

以上、児玉さんの御批判に逐一お答えしてきましたが、少しは御理解いただけたでしょうか。前述しましたように、私自身、はじめは民衆運動を内在的に明らかにするために、民衆を日常生活のなかにおいて考察しようとしてきました。たしかに民衆運動は民衆の日常生活のなかに根をもっていますが、ただ、民衆運動の参加者は民衆全体から見れば常に少数派であったといえます。フランス革命でも積極的に運動に参加したサン・キュロットはパリ民衆のごく一部であったし、1871年のパリ・コミューンにおいても同様でした。ひとたび民衆の日常生活を研究するようになると、民衆運動に必ずしも参加しないこの大多数の民衆を捉えるための方法が必要になってきます。

19世紀の民衆の世界については、アラン・コルバンの社会的表象の研究が示唆に富んでいると思います⁷⁾。例えば、コルバンはこれまで無視されてきた民衆の暴力の問題を正面から取り上げました。民衆の暴力に関するコルバンの研究は、「伝統」的な社会的表象がもつ意味を明らかにするとともに、これまでの民衆運動研究について再考を促しています⁸⁾。

コルバンは、19世紀のパリの革命的民衆像に対しても、民衆の暴力とその「伝統的」な社

会的表象を対置することによって、これまでの19世紀のパリ民衆像に大幅な修正を迫りました。民衆運動のこのような側面の存在は以前から認められてはいましたが、正面から取り上げられてはこなかったと思います。今後はこれらの指摘をふまえて19世紀の民衆について考察していかなければならないでしょう。しかし、この捉え方は、民衆運動が混沌のなかで時に生み出す「創造性」に対する無視をもたらしているともいえます。例えば、コルバンはコミューンについて次のように述べています。「パリ・コミューンは多くの点で時代錯誤的であり、したがって奇異な出来事であったように思われる」⁹⁾。

ここではコルバンはコミューナールの思想と行動を外から決めつけています。彼は、農民の暴力を彼らがおかれていた状況と彼らの社会的想像力を通して捉え直すことによって、みごとにその社会的・政治的な意味を明らかにしているのに¹⁰⁾、どうしてコミューナールに対しては同じ方法を適用しないのでしょうか。これでは児玉さんのいわれた、民衆を「伝統」的心性に固定してしまっていることにならないのでしょうか。民衆の暴力と創造性の両面からコミューナールの社会的表象を捉え直していく作業が必要となるでしょう。そして、このような方法はコミューンだけでなく、19世紀の民衆史さらには政治社会史の今後の研究の方向をも示しているのではないかと思います。

最後に、19世紀のパリ民衆の世界について再考の機会を与えていただいた児玉さんに感謝しつつ、筆をおかせていただきます。

註

- 1) 木下賢一「第二帝政末期のパリの労働運動——労働者評議会を中心に——」『駿台史学』第69号、(1987) p.102-103.
- 2) 同論文、p.102.
- 3) 同論文、p.103.
- 4) 木下賢一「パリ・コミューン前夜の民衆運動——『労働の世界』と運動——」『社会運動史』No.1、(1972).
- 5) 喜安朗『近代フランス民衆の〈個と共同性〉』(平凡社、1994) p.251-253.
- 6) コルバンはさまざまなところで1860年代における深い変容について述べているが、Alain Corbin, *Le Temps, le Désir et l'Horreur*, Aubier, 1991. (小倉孝誠他訳『時間・欲望・恐怖——歴史学と感覚の人類学——』藤原書店、1993)の邦訳の「日本語版によせて」(1-6ページ)に簡潔に要約されている。
- 7) アラン・コルバンの著書は博士論文以外はすべて翻訳されている。
- 8) 民衆の暴力を扱ったものとしては、コルバンの次の著書と論文を参照。Alain Corbin, "Histoire de la violence dans les campagnes françaises au XIX^e siècle. Esquisse d'un bilan," *Ethnologie française*, t. 21, juillet-septembre, 1991. (アラン・コルバン著・工藤光一訳「一九世紀フランス農村における暴力」『思想』836号、1994所収。). Alain Corbin, *Le Temps, le Désir et l'Horreur*. (小倉孝誠他訳『時間・欲望・恐怖』). Alain Corbin, *Le village des cannibales*, Aubier, 1990. (石井洋二郎・石井啓子訳『人喰いの村』藤原書店、1997)。
- 9) Alain Corbin, *Le Temps, le Désir et l'Horreur*, p.222. (邦訳『時間・欲望・恐怖』p.264-265)。
- 10) 特に *Le village des cannibales* における社会的表象を中心に据えた分析。